一　調査経過

１．位置と環境（第１～３図）

地理的位置　熊本県北部を代表する河川の菊池川は、熊本県の歴史において重要な役割を担ってきた。高熊古墳は、菊池川の中流域に形成された菊鹿盆地の南端、その支流である合志川流域に位置している。当古墳は合志川に流れ込む夏目川、小野川という二つの河川の開析によって形成された舌状台地の北縁にある。当地は熊本県域の南北をつなぐ交通の要衝である。

高熊古墳の位置

菊池川流域における古墳の動向　古墳時代前期前半における前方後円墳築造の中心は、県南の宇土半島基部であった。高熊古墳の所在する県北の菊池川流域では、まず下流域で前期後半に古墳が築造され始めた。主な古墳に下流域左岸の山下古墳（前方後円墳・59m）、天水立花大塚古墳（前方後円墳・100m）、右岸では院塚古墳（前方後円墳・78m）、藤光寺古墳（前方後円墳・85m）などがある。中期になると前方後円墳築造の中心は菊池川中流域に移動する。墳長102mを誇る岩原双子塚古墳（前方後円墳）が筆頭としてあげられ、他に銭亀塚古墳（前方後円墳・65m）などがある。下流域左岸上手では若宮古墳（前方後円墳・30m）などが築造されている。

古墳時代前期

中期

中期中葉から後葉にかけて、熊本県域全体において前方後円墳の築造が低調となる。このような時期に、熊本県域の南北をつなぐ要衝の地に高熊古墳が築造されるのである。

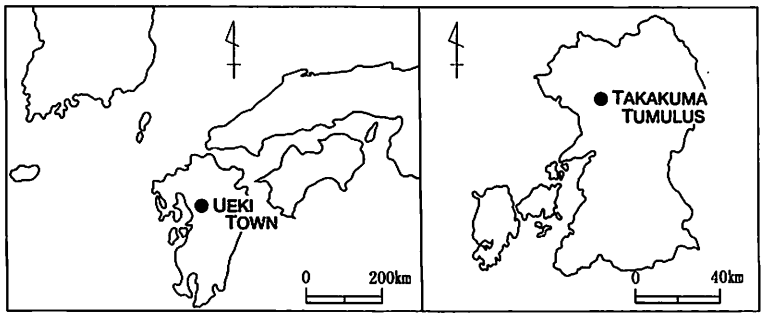
後期になると菊池川下流域で前方後円墳の築造が盛んとなる。下流域左岸上手では銀象嵌銘大刀が出土した江田船山古墳（前方後円墳・62m）、虚空蔵塚古墳（前方後円墳・44.5m）が、下流域右岸では稲荷山古墳（前方後円墳・110m）が築造される。これ以降の時期になると熊本県域全体において、多くの古墳が盛んに築造されるようになった。その中で県南の氷川下流域は注目すべき地域であり、野津古墳群に大規模な前方後円墳が集中して築造されたのである。一方、県北の菊池川下流域右岸では大坊古墳（前方後円墳・42m）、中流域の岩野川流域ではチブサン古墳（前方後円墳・44m）、中流域右岸では中村双子塚古墳（前方後円墳・60～70m）、菊池地域では蛇塚古墳（前方後円墳・21m）が築造された。

後期

これ以降、菊池川中流域では、木柑子フタツカサン古墳（前方後円墳・65m）、木柑子高塚古墳（前方後円墳・規模不明）を最後に前方後円墳の築造は停止する。以後は円墳や横穴墓が築造の中心となるが、特に横穴墓は終末期において発達する。なお、そうした中で、県南の宇土半島基部に築造された椿原古墳（19m）は、熊本県唯一の方墳として特筆すべき存在である。

前方後円墳築造の停止

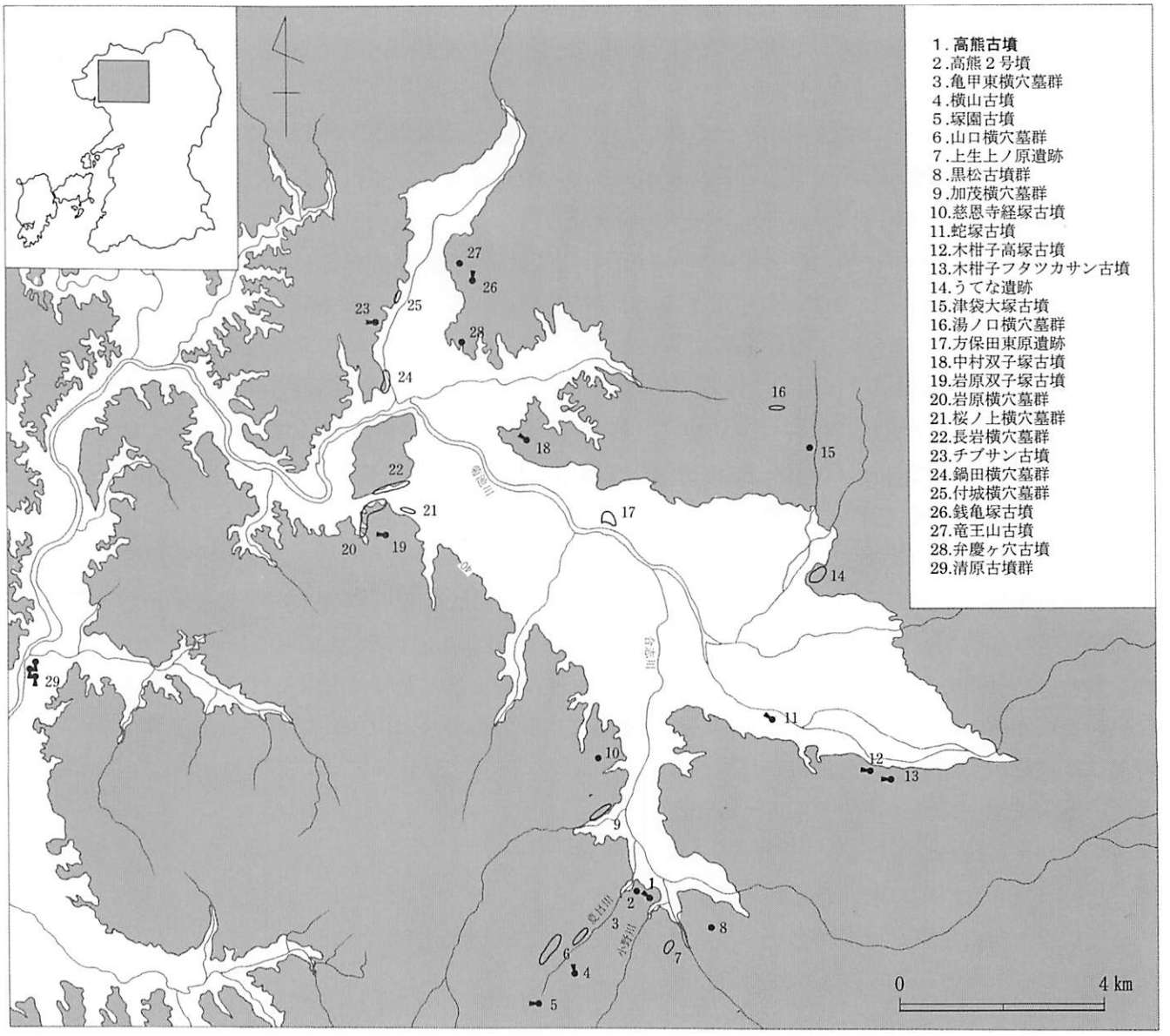
高熊古墳周辺の歴史　当地域の旧石器時代の遺跡には長沖遺跡（山鹿市）などがある。縄文時代には遺跡数が増加し、大集落が形成される。三万田式土器の標識遺跡である三万田東原遺跡（泗水町）、御手洗遺跡（合志町）、太郎迫遺跡（植木町）のほか、石器製作遺跡の二子山遺跡（西合志町）などが存在する。弥生時代では、著名な方保田東原遺跡（山鹿市）のほかに、蒲生上ノ原遺跡（鹿本町）やうてな遺跡、小野崎遺跡（七城町）などがある。



第１図　高熊古墳の位置

合志川流域の古墳動向

古墳時代の合志川流域の古墳動向について述べると、中期前葉から中葉にかけて県下最大級の円墳である慈恩寺経塚古墳（53m）が築造される。それにやや遅れて高熊古墳が築造された。高熊古墳の西約200mにある高熊２号墳は、保存状態がきわめて良好な甲冑類を出土したマロ塚古墳とも見られているが確証はない。しかし、マロ塚古墳が当地域周辺のどこかに存在したことはほぼ確かであろう。また、慈恩寺経塚古墳や、集落遺跡である上生上ノ原遺跡の４号石棺からも鉄製武具類が出土しており、当地域は鉄製品の集積地帯となっている。高熊古墳はこうした合志川流域における最初の前方後円墳なのである。また、その築造時期は、熊本県域において前方後円墳の築造が低調になった時期と重なっている。これらのことから、高熊古墳は、当地域のみならず熊本県域全体の古墳動向を考える上できわめて重要な位置を占めているといえる。なお、高熊古墳に続く古墳として塚園古墳（前方後円墳・40m）が想定されているが、詳細は不明である。後期に入ると12基の古墳を持つ石川山古墳群や横山古墳（前方後円墳・38m）、鬼のいわや古墳（円墳・20m）などが築造される。また後期から終末期には加茂横穴墓群、山口横穴墓群、亀甲東横穴墓群などで多数の横穴墓が築造されている。



第２図　周辺の遺跡分布図

２．調査経過

調査目的　熊本大学文学部考古学研究室では2001年度から、熊本県地域における古墳動向の解明を調査・研究活動のテーマの１つとしている。その第１のフィールドとして鹿本郡植木町周辺地域を選択した。それは、当地域が熊本県の北部と南部をつなぐ重要な地点であること、したがって当地域は熊本県地域全体の古墳動向を考察するうえで欠くことのできない場所であること、しかし当地域の古墳の内容には不明な点が多いことなどが理由である。

第３図　高熊古墳周辺の地形

これまでの調査と現状

高熊古墳は植木町古閑天神平に所在する前方後円墳である。これまでも、熊本県地域において前方後円墳の築造が低調となる中期後半の首長墓として注意されてはいたが、1964年に墳丘測量図が公表（田辺1964）されて以来、本格的な調査がなされたことはなかった。とくに墳丘裾が大きく削平されているため、墳丘の正確な形態や規模には不明な点が多かった。そうしたなかにあって、当古墳からは精美なＢ種ヨコハケが施された円筒埴輪片や鍵手文が刻まれた家形埴輪片が採集され、それら資料は熊本県地域ではまれなものであったことから、当古墳の重要性が強く認識された。こうした点を受け、墳丘規模・構造の解明を主な目的として、高熊古墳の測量調査および発掘調査に着手したのである。

調査目的

高熊２号墳

なお、高熊古墳の調査と並行してその西約200ｍにある高熊２号墳の測量調査も実施したが、その成果については「高熊２号墳測量調査報告」として公表している（杉井・檀編2003）。

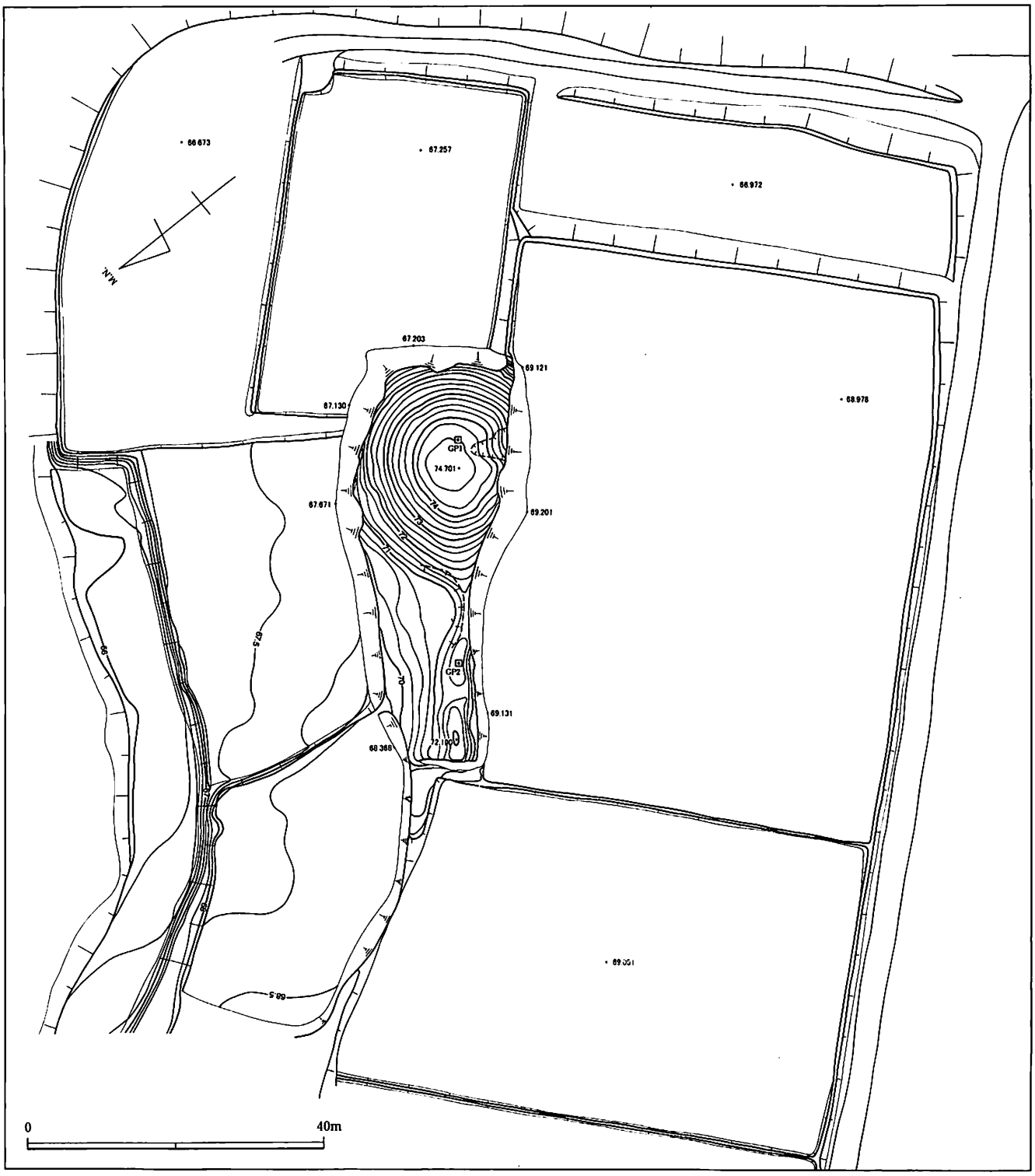
第１次調査

調査経過　第１次調査（測量調査）は、2002年３月１日から11日および2003年３月10日から13日の２回に分けて行った。平板測量によって、墳丘残存部については縮尺100分の１、周辺の畑地や山林については縮尺300分の１で、25cm間隔の等高線を描いた。後円部および前方部の２箇所には今後の調査に備えて恒久的な測量基準杭（ＧＰ１・ＧＰ２）を設置した。なお、2002年３月26日には、地元の古閑公民館にて、測量調査の成果についての講演会を実施した。

第２次調査

第２次調査（発掘調査）は、2003年８月８日から25日までの18日間で実施した。古墳の東側および南側は区画整理され畑地として利用されているため、トレンチは古墳の北側の山林部分に設定した。当初、トレンチは２箇所（前方部第１・クビレ部第１）であったが、両トレンチで検出された黒色土によるいくつかの落ち込みの相互関係を確認するため、それらの間にもう１つのトレンチ（前方部第２）を追加した。その結果、弥生時代後期の土器を多く含む溝と古墳の周溝が切り合っていることが判明した。本来ならば、表土を除去した時点でそれら２つの溝の切り合い関係を確認し、とくに前方部第１トレンチにおいては古墳の周溝部分のみを掘り下げるべきであった。しかし、類似した埋土であったためそれを行うことができなかった点は反省すべきことである。なお、周溝が二重にめぐる可能性も想定して前方部第１トレンチを北へ長く設定したが、その存在を確認することはできなかった。また、その北端部では地山の傾斜を確認するための坪掘りを行った。遺物では、埴輪のほかに須恵器の器台坏部片が検出された点が重要で、当古墳の時期を考える上で大きな示唆を与えた。

調査の成果がおよそまとまった８月21日には記者発表を行った。また、23日には現地説明会を実施し、60余名の参加者を得た。その後埋め戻しを行い、25日の撤収をもって現地での作業



第４図　墳丘および周辺地形測量図

を終了した。なお、発掘調査面積は36.6㎡である。

参考文献
杉井健・樫佳克編　2003「Ⅲ　高熊２号墳測量調査報告」「考古学研究室報告」第38集　熊本大学文学部考古学研究室
髙木恭二　2003「熊本における古墳の動向」「新宇土市史」通史編第１巻　自然・原始古代　宇土市
田辺哲夫　1964「高熊古墳調査報告（その１）」「玉名高校考古学部部報」第７号　熊本県立玉名高等学校考古学部
田辺哲夫　1967「高熊古墳調査報告（続）」「玉名高校考古学部部報」第18号第２部　熊本県立玉名高等学校考古学部

二　墳丘の構造

１．墳丘の現状（第４図）

高熊古墳は、熊本県鹿本郡植木町古閑天神平に所在する前方後円墳である。当地域は菊鹿盆地の南側にあたり、高熊古墳は北東方向に張り出した舌状台地の先端に位置している。そのため、当古墳からは、眼下に菊鹿盆地を一望することができる。なお、舌状台地の直下には水田が広がっており、当古墳の位置する舌状台地との比高差は約30mである。

高熊古墳の位置

古墳の周囲について述べると、現在、北側は山林となっている。一方、南側には区画整理された農地が広がっている。墳丘の北側裾と比較して南側裾の標高が２m程度高いが、それは、圃場整備に際し土入れが行われたためであると思われる。なお、北側の山林部分も、植林の際などに平坦面が造り出されている可能性が高い。

古墳の周囲

現状における墳丘の残存長は約59mである。しかし、墳丘は周囲を大きく削平されているため、本来の規模は明らかでない。削平は墳丘の南側でとくに著しい。現状の墳丘において葺石の存在は確認できない。段築についても、残存する後円部では確認することができない。しかし、クビレ部から前方部にかけての標高70.00～70.25m辺りに傾斜が緩やかになる箇所が存在する。この状況を重視すれば、この箇所にテラス面の存在を想定することが可能である。さらに、墳丘北側裾の標高および後円部斜面の現状を考慮すれば、当古墳は２段築成であった可能性がある。なお、当古墳は前方部を西に向けるが、ＧＰ１杭とＧＰ２杭を結んだラインを墳丘主軸と仮定すれば、その方向はN50°57′50″Wである（北は磁北）。

墳丘の現状

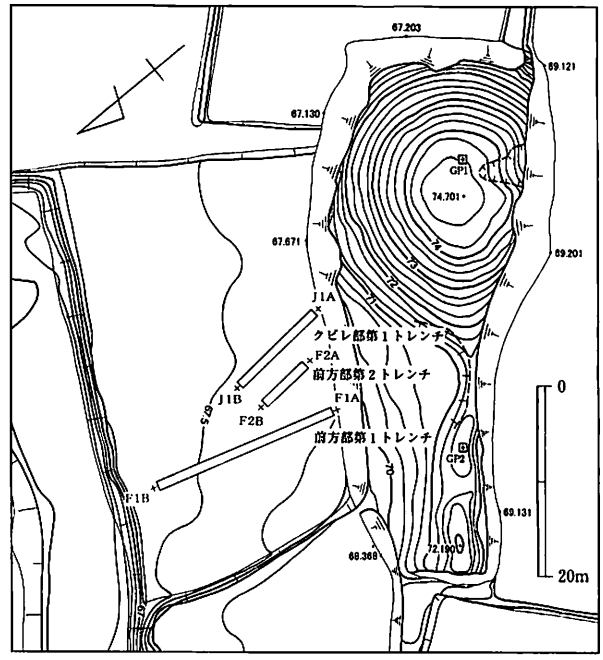
葺石と段築

後円部墳頂には、現状で狭い平坦面が存在し、その最高点の標高は約74.7mである。墳丘裾の標高が約67～69mであるから、その比高差は約５～８mとなる。後円部斜面は、等高線に大きな乱れがないことから旧状を保っている可能性が高い。クビレ部南側は、前述のように削平が著しいために、本来の形状をうかがうことはできない。一方北側では、若干の乱れはあるが、後円部から前方部へ緩やかにつながる等高線をみることができる。しかし、70.75mラインから上部はえぐるように削平されている。前方部前端も大きく削平されており、本来の前方部長は不明である。しかし、削平部から西へ、標高69.5m前後の低い高まりが続いている。この高まりを前方部の残存と仮定することができるのならば、墳丘残存長は約70mとなる。なお、前方部最高点の標高は約72.2mであり、現状で平坦面は存在しない。

２．トレンチの設定（第５図）

墳丘規模・構造の解明を目的に、古墳北側の山林部分へ３本のトレンチを設定した。それらは、植林された木々の間をぬうようにして配置している。

トレンチは、前方部側に設定したものを西から、前方部第１トレンチ、前方部第２トレンチ、クビレ部付近に設定したものをクビレ部第１トレンチと呼称する。



第５図　トレンチ配置図

3．調査の所見

（1）前方部第1トレンチ（第6図の上、図版1－1・4、2－1）

墳丘面の検出、および周溝・周堤の有無の確認を目的として設定した。1・2層はトレンチ全体に水平に堆積し、各時代の遺物が出土することから、当地に平坦面が形成されて以後の堆積層と判断できる。

古墳築造以前の溝と周溝の切り合い

トレンチ南半部では、2層直下で黄褐色の地山への掘り込みが検出された。検出当初はその掘り込み全体が古墳の周溝であると考えたが、遺物の出土状況、および後述するクビレ部第1トレンチの状況から、古墳築造以前の溝と古墳の周溝が切り合っているものと判断した。

まず出土遺物をみると、16・18層以上では円筒埴輪や須恵器が出土しているが、19層以下では古墳築造以降と判断される遺物が出土していない状況にある。そうした視点のもとに断面をみると、16層がのる地山上面ラインと18・19層の境界ラインが一連のカーブを描いていることを観察できる。また、そのカーブ上端の平面的位置は、クビレ部第1トレンチで検出された周溝のほぼ延長線上に当たる。さらに、南側の地山立ち上がりの位置は、クビレ部第1トレンチ検出の古墳築造以前の溝におよそ対応する。これらのことから、19層以下を埋土とする溝を切るかたちで古墳の周溝が形成された状況を復元できる。これは、18・19層境界ラインのレベルとクビレ部第1トレンチの周溝底面のレベルがほぼ同一であることからも妥当であるといえる。以上の点および他のトレンチの様相を総合して検討した結果、当トレンチにおける墳端は、F1A杭から北へ3.66m、標高67.04mの位置と判断した。なお、周溝底面はここから北へゆるやかにレベルを上げているが、これはクビレ部第1トレンチの状況とは異なっている。

周堤存在の可能性

トレンチ中央部から北半部では、いったん平坦面を形成した地山が徐々にレベルを下げていく状況を確認した。重要なのはこの平坦面が周溝にほぼ平行する点で、ここが周堤の一部をなす可能性を示している。

（2）前方部第2トレンチ（第6図の中、図版1－2、2－2）

周溝の確認

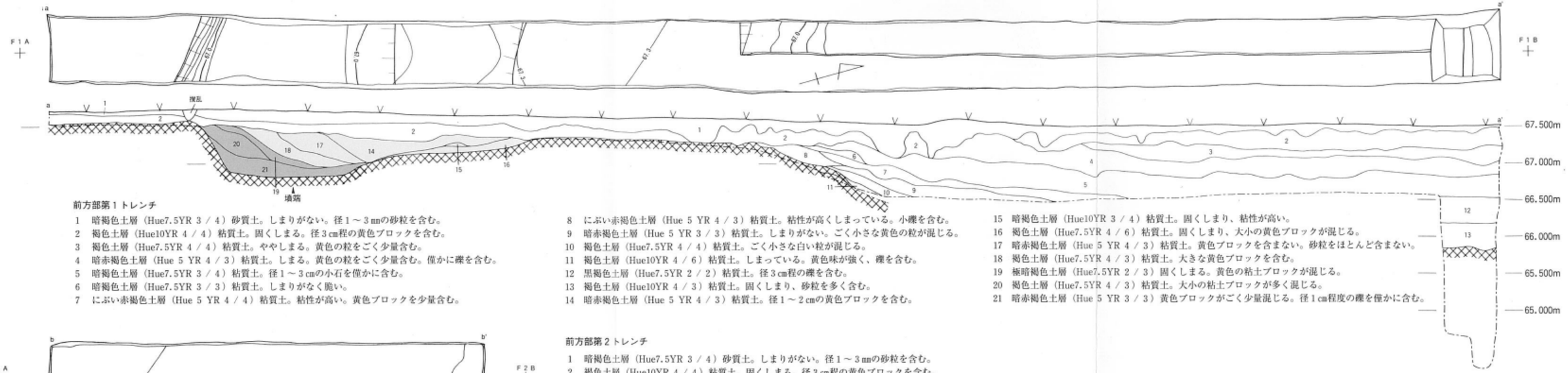
前方部第1トレンチ、クビレ部第1トレンチで検出された周溝の連接関係を確認するために設定した。1・2層を除去した段階で、トレンチ北側では地山への掘り込みラインが検出された。一方、南側では、6・7層の境界ラインが、前方部第1トレンチやクビレ部第1トレンチで検出された周溝南側の落ち込みラインと対応する位置で観察された。また、この6層からは埴輪片が出土した。以上のことから、6・7層の境界ラインと北側で検出された地山への掘り込みラインのあいだを古墳の周溝と判断した。なお、当トレンチでは周溝埋土の掘り下げを行っていない。

（3）クビレ部第1トレンチ（第6図の下、図版1－3・5、2－3）

墳丘面の検出および周溝の有無の確認を目的に設定した。1・2層を除去した段階で、トレンチの南側および中央部において2本の溝状遺構を検出した。南側の溝状遺構はJ1A杭から0.56～4.54m、中央部のものは4.73～8.78mに位置している。

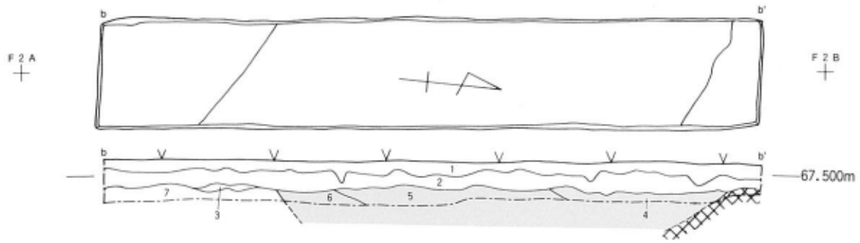
古墳築造以前の溝

南側の溝状遺構からは、弥生土器および古墳時代前期前半の土師器が出土した。また、この溝と古墳の位置関係から判断すると、溝は後円部墳丘下へ延びていく可能性が高い。以上のことから、この溝状遺構は古墳築造以前のものであると判断できる。すなわち、高熊古墳はこの溝の埋没後、その上に築造されていると考えられる。なお、前方部第1トレンチでは、この溝が古墳の周溝によって切られていることが確認されている。



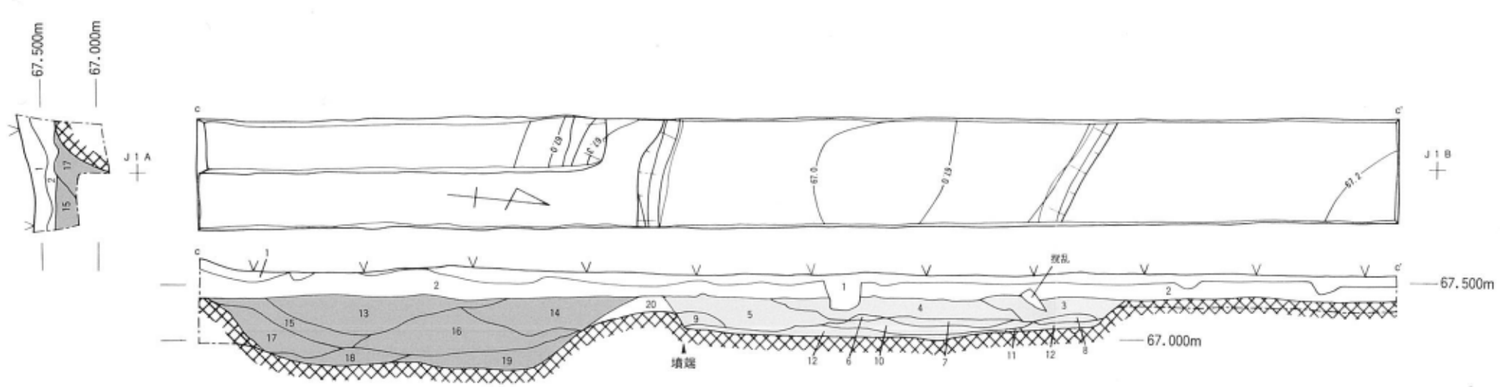
前方部第１トレンチ

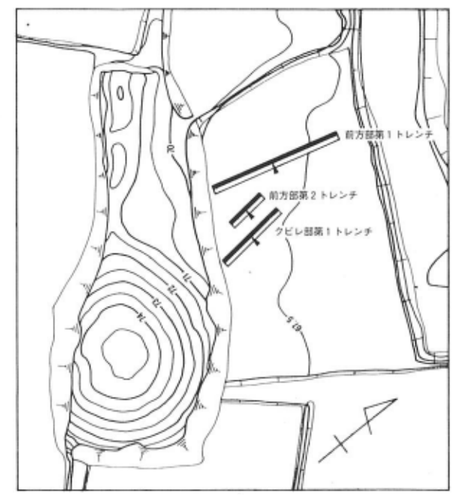
1　暗褐色土層（Hue7.5YR 3 / 4）砂質土。しまりがない。径１～３mmの砂粒を含む。
2　褐色土層（Hue10YR 4 / 4）粘質土。固くしまる。径３cm程の黄色ブロックを含む。
3　褐色土層（Hue7.5YR 4 / 4）粘質土。ややしまる。黄色の粒をごく少量含む。
4　暗赤褐色土層（Hue 5 YR 4 / 3）粘質土。しまる。黄色の粒をごく少量含む。僅かに礫を含む。
5　暗褐色土層（Hue7.5YR 3 / 4）粘質土。径１～３cmの小石を僅かに含む。
6　暗褐色土層（Hue7.5YR 3 / 3）粘質土。しまりがなく脆い。
7　にぶい赤褐色土層（Hue 5 YR 4 / 4）粘質土。粘性が高い。黄色ブロックを少量含む。
8　にぶい赤褐色土層（Hue 5 YR 4 / 3）粘質土。粘性が高くしまっている。小礫を含む。
9　暗赤褐色土層（Hue 5 YR 3 / 3）粘質土。しまりがない。ごく小さな黄色の粒が混じる。
10　褐色土層（Hue7.5YR 4 / 4）粘質土。ごく小さな白い粒が混じる。
11　褐色土層（Hue10YR 4 / 6）粘質土。しまっている。黄色味が強く、礫を含む。
12　黒褐色土層（Hue7.5YR 2 / 2）粘質土。径３cm程の礫を含む。
13　褐色土層（Hue10YR 4 / 3）粘質土。固くしまり、砂粒を多く含む。
14　暗赤褐色土層（Hue 5 YR 4 / 3）粘質土。径１～２cmの黄色ブロックを含む。
15　暗褐色土層（Hue10YR 3 / 4）粘質土。固くしまり、粘性が高い。
16　褐色土層（Hue7.5YR 4 / 6）粘質土。固くしまり、大小の黄色ブロックが混じる。
17　暗赤褐色土層（Hue 5 YR 4 / 3）粘質土。黄色ブロックを含まない。砂粒をほとんど含まない。
18　褐色土層（Hue7.5YR 4 / 3）粘質土。大きな黄色ブロックを含む。
19　極暗褐色土層（Hue7.5YR 2 / 3）固くしまる。黄色の粘土ブロックが混じる。
20　褐色土層（Hue7.5YR 4 / 3）粘質土。大小の粘土ブロックが多く混じる。
21　暗赤褐色土層（Hue 5 YR 3 / 3）黄色ブロックがごく少量混じる。径１cm程度の礫を僅かに含む。



前方部第２トレンチ

1　暗褐色土層（Hue7.5YR 3 / 4）砂質土。しまりがない。径１～３mmの砂粒を含む。
2　褐色土層（Hue10YR 4 / 4）粘質土。固くしまる。径３cm程の黄色ブロックを含む。
3　褐色土層（Hue10YR 4 / 4）粘質土。粘性が非常に高く、粒子が細かい。
4　褐色土層（Hue10YR 4 / 4）粒子が細かくしまりがない。若干黄色ブロックを含む。
5　暗褐色土層（Hue10YR 3 / 4）しまりがない。黄色ブロックを含む。径５mm程の礫を含む。
6　黒褐色土層（Hue10YR 2 / 3）粒子が粗くしまりがない。黄色ブロックを多く含む。径５mm程の礫を含む。
7　褐色土層（Hue10YR 4 / 6）しまりがない。少量の黄色ブロックを含む。





周溝埋土
古墳築造以前の溝埋土
地山

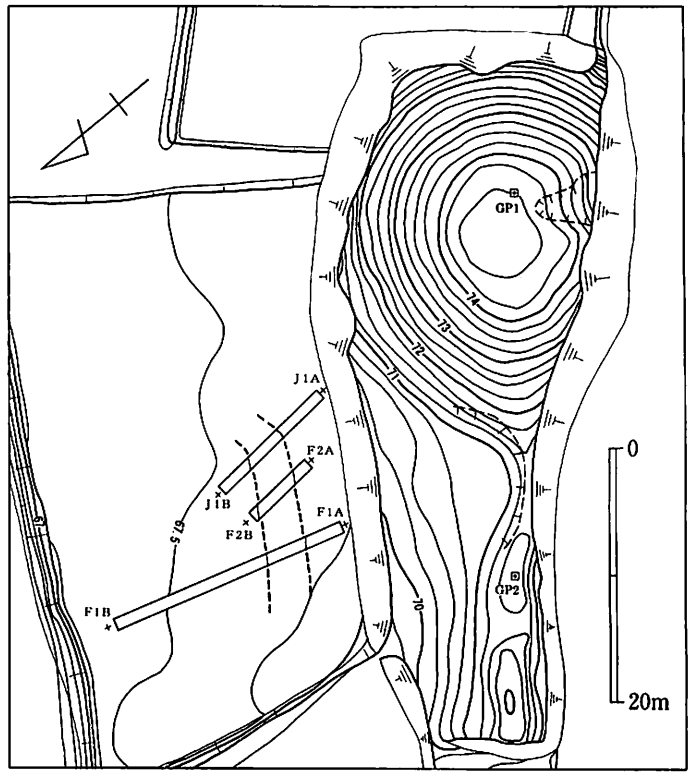
0　4 m

クビレ部第１トレンチ

1　暗褐色土層（Hue7.5YR 3 / 4）砂質土。しまりがない。径１～３mmの砂粒を含む。
2　褐色土層（Hue10YR 4 / 4）粘質土。固くしまる。径３cm程の黄色ブロックを含む。
3　褐色土層（Hue10YR 4 / 4）粒子が細かくしまりがない。若干黄色ブロックを含む。
4　暗褐色土層（Hue10YR 3 / 4）しまりがない。黄色ブロックを含む。径５mm程の礫を含む。
5　黒褐色土層（Hue10YR 2 / 3）粒子が粗くしまりがない。黄色ブロックを多く含む。径５mm程の礫を含む。
6　褐色土層（Hue7.5YR 4 / 3）粒子が細かく粘性が高い。非常に固くしまる。
7　褐色土層（Hue7.5YR 4 / 6）粒子が細かく、しまりがない。
8　褐色土層（Hue10YR 4 / 6）粒子が細かい。径５mm程の礫を含む。非常に固くしまる。
9　暗褐色土層（Hue10YR 3 / 4）粒子は細かく、粘性は低い。黒味が強い。
10　褐色土層（Hue7.5YR 4 / 4）粒子が細かい。黄色ブロックを多量に含む。
11　褐色土層（Hue10YR 4 / 6）粒子が細かく非常に固くしまる。
12　黄褐色土層（Hue10YR 5 / 8）粒子が粗い。径２、３cmの礫を含む。
13　暗褐色土層（Hue10YR 3 / 3）粒子が細かい。粘性が高く黄色ブロックを多く含む。
14　褐色土層（Hue10YR 4 / 6）しまりがない。少量の黄色ブロックを含む。
15　褐色土層（Hue7.5YR 4 / 3）粒子が粗く、しまりがない。多量の黄色ブロックを含む。
16　暗褐色土層（Hue10YR 3 / 4）しまりがなく、若干黄色ブロックを含む。
17　褐色土層（Hue7.5YR 4 / 4）粘性がある。しまりがなく、少量の黄色ブロックを含む。
18　褐色土層（Hue10YR 4 / 4）粒子が粗いがしまっている。黄色の粘土ブロックを多量に含む。
19　にぶい黄褐色土層（Hue10YR 4 / 3）粒子が粗い。径１～５cmの礫を多量に含む。
20　にぶい黄褐色土層（Hue10YR 4 / 3）粒子が粗い。黄色ブロックを多量に含む。

第６図　トレンチ平面図・断面図（上：前方部第１トレンチ、中：前方部第２トレンチ、下：クビレ部第１トレンチ）

一方、中央部の溝状遺構からは、円筒埴輪、形象埴輪、須恵器、弥生土器などが出土した。遺物の内容や残存する墳丘との位置関係から、この溝は古墳の周溝であると推測できる。底面幅は3.66m、周溝底の標高は66.96mをはかり、墳端はＪ１Ａ杭から4.92mの位置にある。なお、墳丘側の周溝ラインはトレンチのほぼ中央で屈曲していることが確認された。ラインはこの位置から東へ後円部に沿うように延びる可能性が想定できる。その場合、この付近に後円部と前方部の連接部分があると推測できる。



第７図　墳丘北側の墳端ライン想定図

４．墳丘の形態（第７図）

高熊古墳は、墳丘の全周を削平されているため本来の形状が明らかでなかった。今回の調査で、周溝および周堤と思われる地形を確認したので、それらをもとに墳丘の形態について述べる。

前方部

前方部第１トレンチ、クビレ部第１トレンチにおいて墳端を確認した。また、前方部第２トレンチで周溝の落ち込み上端ラインを検出した。これらを結ぶラインが、前方部北側の墳端ラインの一部をなしていると推測できる。さて、その墳端ラインをみると、墳丘上の標高70.75mラインにほぼ平行するように走ることがわかる。これを最大限に評価すれば、今回検出した墳端ラインは、標高70.75mラインに沿うかたちで、前方部前端方向へ延びる可能性がある。そうであるならば、前方部第１トレンチの今少し西側において、その墳端ラインはやや北側へ屈曲するように延びていく可能性も考えられる。

後円部

一方、今回得られた後円部に関する情報はほとんどない。ただし、クビレ部第１トレンチで検出した墳端ラインの屈曲部を後円部と前方部の連接部付近であると評価することが可能ならば、この位置と現状の後円部墳頂平坦面の中心との距離がおよそ25mであるから、後円部の直径を約50m程度と復元することもできるだろう。

以上の前方部および後円部についての所見をもとに、第７図を作成した。ただし、未確定なことが多く、さらなる調査が必要であることはいうまでもない。

周溝と周堤

なお、今回検出した周溝の外周ラインは墳丘に沿うように延びているから、鍵穴形の周溝であった可能性がある。また、前方部第１トレンチの中央部でみられた平坦な地形は、これが周溝にほぼ平行する点から判断すれば、周堤の一部となる可能性がある。

５．古墳築造以前の溝と墳丘の構築

古墳築造以前の溝と墳丘の構築

今回の調査では、古墳築造以前の溝も検出した。この溝からは弥生土器および古墳時代前期前半の土師器が出土している。このうち主体を占めるものは弥生時代後期の土器である。このことから、この溝は弥生時代後期頃に埋まり始め、古墳時代前期前半には完全に埋没したと推測できる。出土した土器を根拠にすれば、この溝は弥生時代の集落を囲う環濠の一部である可能性が高い。高熊古墳はこの溝の埋没後、その上に築造されている。なお、残存する墳丘部分で多くの弥生土器が表採されることから、古墳の盛土には弥生時代の集落遺構を削平することによって得られた土が用いられていると判断できる。

三　出土遺物

1．遺物の概要

遺物の概要

今回の調査ではコンテナ５箱分（1858点）の遺物が出土した。そのほとんどが砕片で、全体の形態をうかがえるものは少ない。古墳に伴う遺物としては、円筒埴輪、形象埴輪、須恵器がある。なかでも須恵器は、当古墳の築造年代を考える上で重要な遺物である。一方、古墳に伴わない遺物としては、縄文土器、弥生土器、古墳時代前期前半の土師器、陶磁器がある。以下に各遺物の内容を記述するが、出土位置等については第１表にまとめて示している。

2．古墳に伴う遺物

（1）円筒埴輪（第８図、図版３）

器壁が薄いもの

高熊古墳出土の円筒埴輪は、器壁が薄いものと厚いものの２種類に分けることができる。

器壁が薄いもの（１～11・16・17）は作りが丁寧で精美な印象を与える。直径の大きいものが多い。１～５は口縁部である。その形態は、端部が外反するもの（１）と直立するもの（２～５）の２つに分けられる。口縁端部が直立する形態は、さらに、器壁が若干厚手で口縁端部内面にわずかな斜めの面を持つもの（５）と持たないもの（２～４）に分けることができる。口縁端部が外反するもの（１）の外面調整はタテハケのみである。６～11は胴部である。胴部の外面には条線間隔が密で丁寧なＢ種ヨコハケが施されている。９のようにＢｃ種ヨコハケが観察できる個体もある。突帯は、突出度が小さく断面形態が台形であるという特徴を持つ。16・17は底部である。これらは底部から胴部へと一定の厚さで立ち上がる。底部下面には棒状品の圧痕があり、平らな接地面を持たない。外面には条線間隔が密で丁寧なタテハケが施されている。

器壁が厚いもの

器壁が厚いもの（12～15・18・19）は作りが雑で稚拙な印象を与える。全体的に直径が小さい。12～14は胴部である。外面には二次調整ヨコハケが施されており、ハケの条線間隔が密なものと粗なものに分けることができる。条線間隔が粗なものの中には須恵質の個体もある（14）。突帯は、器壁が薄いものとは異なり、突出度が大きく端面が丸みを帯びている。18・19は底部である。上述の16・17に比べて器壁が著しく厚い。また、粘土接合痕が明瞭に残っている。底部下面は平らで広い接地面を持つ。外面には条線間隔が粗で雑なタテハケが施されている。15は胴部の破片であるが、三角形の透孔を持つ点で特異な存在である。外面には条線間隔が粗な一次調整タテハケのみが施されている。

朝顔形円筒埴輪

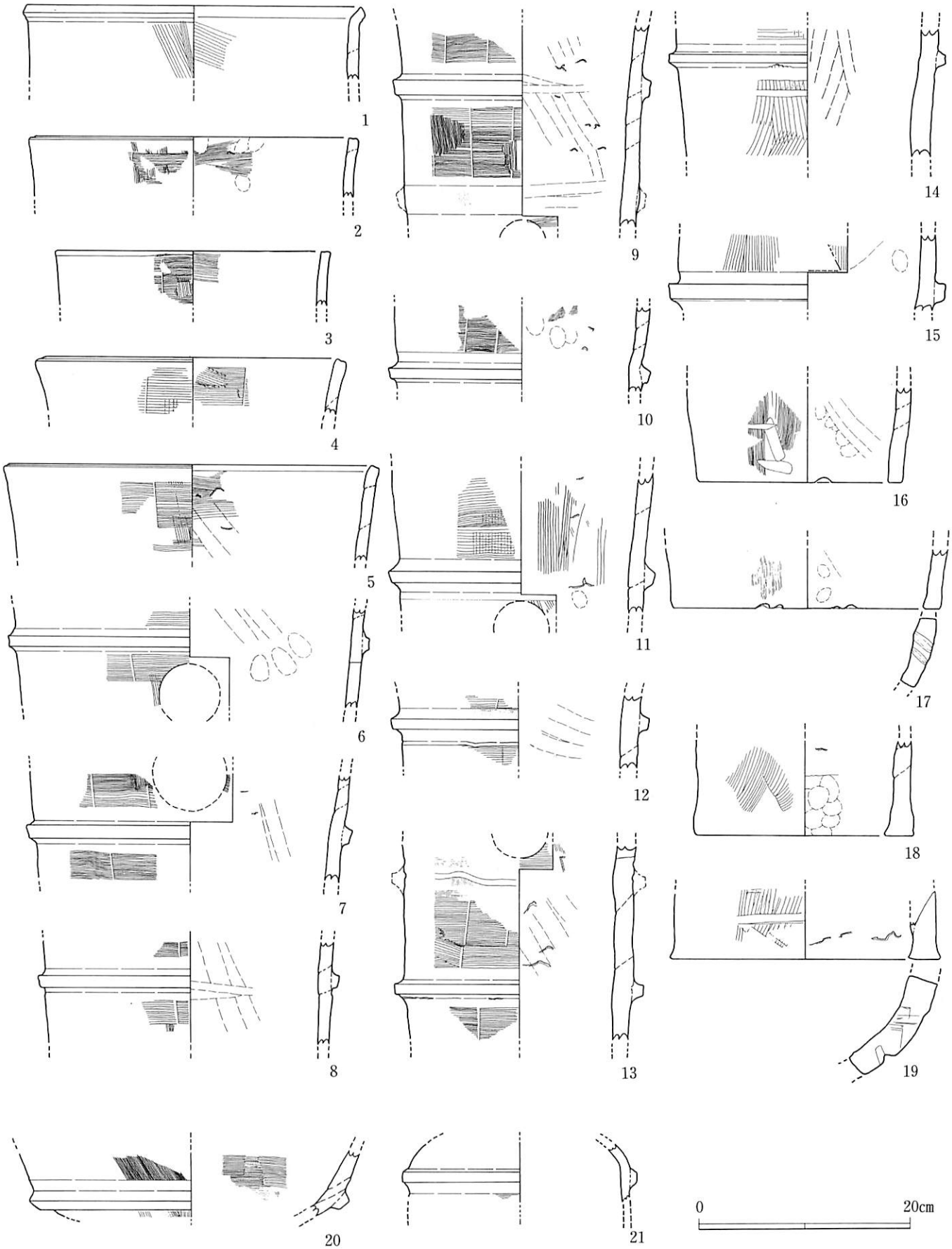
20・21は朝顔形円筒埴輪の頸部と肩部である。器壁は薄い。頸部（20）には条線間隔が密な一次調整タテハケのみがみられる。突帯の上面と側面には強いナデが施されるが、下面には弱いナデが施されるのみである。肩部（21）は風化が激しいが、ヨコハケをわずかに観察することができる。突帯は突出度が小さく、断面形態は台形である。

埴輪の位置付け

当古墳のほとんどの円筒埴輪の外面には二次調整ヨコハケが施されており、透孔は円形である。また黒斑を有していない。したがって、これら円筒埴輪は川西編年のⅣ期（川西1978）、竹中克繁による九州編年では九州３期（竹中2003）に位置付けられる。

（2）形象埴輪（第９・10図、図版４）

今回の調査では家形埴輪片13点、人物埴輪片２点、不明形象埴輪片２点の計17点が出土した。以下、家形埴輪１～13、人物埴輪15・16、不明形象埴輪17・14の順に述べる。



第８図　円筒埴輪実測図

家形埴輪

まず、家形埴輪について述べる。1は屋根頂部の鰭飾りと考えられる。鰭飾りは、家形埴輪の装飾的要素であり、堅魚木より以前の要素と考えられている。また、その分布は畿内地域を中心に西日本に限られる（宮本1995）。主に入母屋造りの家に採用されていたことから、この破片も入母屋造りの屋根の装飾品であった可能性が高い。2～6は屋根部と考えられる。2は屋根庇下端部と考えられる。内面には壁の剥離痕がある。3・4は屋根のコーナー部と考えられる。3の外面には工具によって水平に沈線が施されている。また、内面には壁の剥離痕がある。4は一部に本来の外器面を残すが、全体的に摩滅が著しい。破片の形状より、3・4は入母屋造りあるいは寄棟造りの家であると推測される。5・6は屋根庇部と考えられる。これらの外面には突帯が剥離した痕跡があり、内面には塗布された赤色顔料が残っている。6は、その角の部分が直角に作られていないという特徴があることから、切妻造りの屋根庇部であると判断できる。7～12は壁部と考えられる。7の側面には、水平方向の沈線が2本みられる。これらの沈線は、窓の位置の粘土が切り抜かれた際についた刀子などの工具痕ではないかと考えられる。8の外面には、明瞭ではないが赤色顔料が残っている。9の柱形には、鍵手文の一部と判断できる文様がある。これは、壁面に薄い粘土板を貼り付けることによって表現された柱形の上に、工具で線刻が施されたものである。外面には赤色顔料が残っている。なお、粘土剥離痕の様相から判断すれば、9は家形埴輪の二階部分である可能性がある。10は摩滅が激しい。11は壁のコーナー部、12は壁基部のコーナー部と考えられる。11の外面には縦方向のハケが、12の外面には横方向および縦方向のハケが施されている。12の外面には赤色顔料が残っている。13は裾台部と考えられる。一般に、裾台部下面は水平に作られることが多い。しかし、これの下面は水平に整形されておらず、特徴的である。

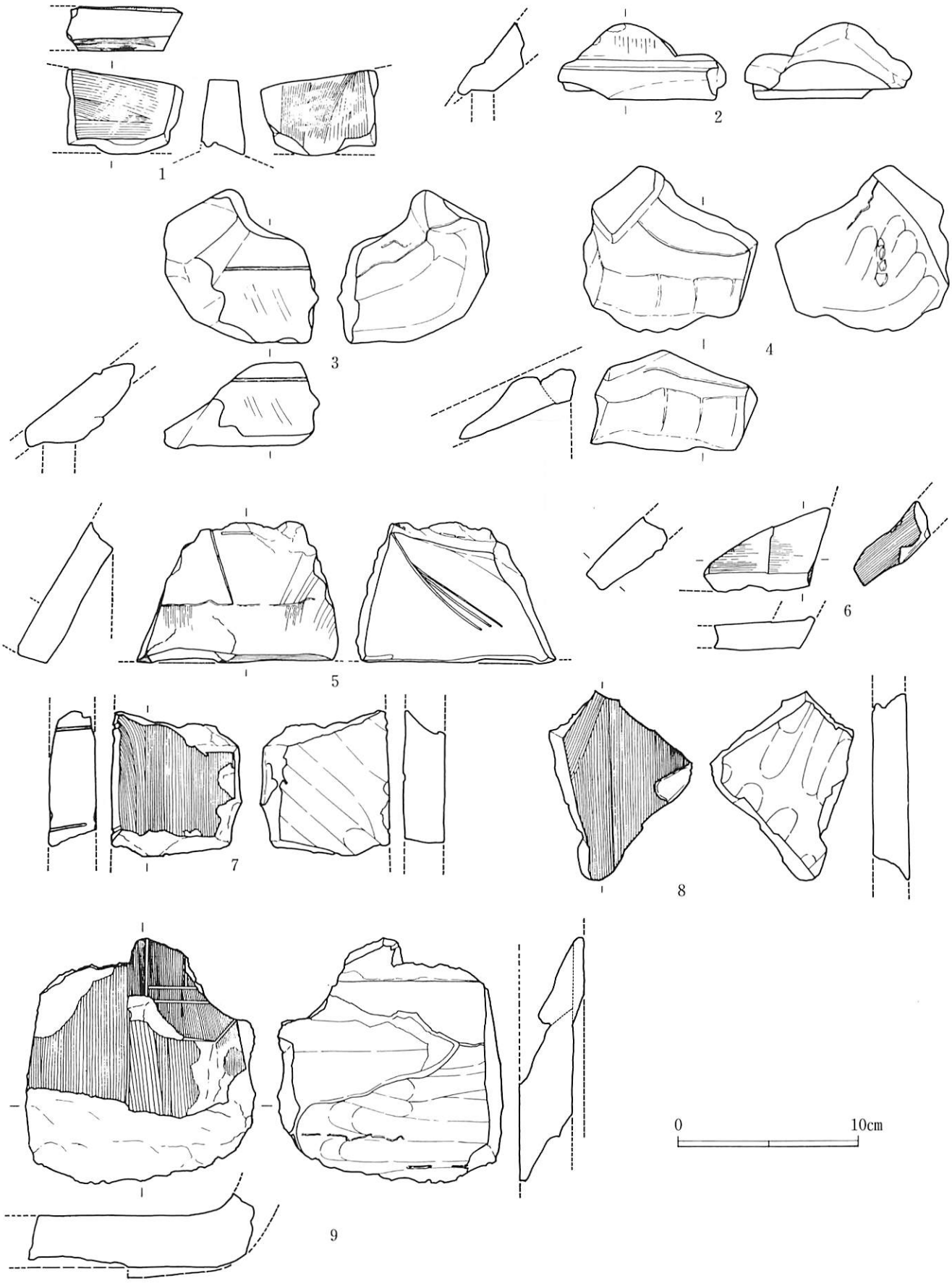
ここで、家形埴輪についてまとめておこう。まず、今回の調査では原位置をとどめたものは出土しなかった。そのため、これらの家形埴輪がどのように配置されていたのかは全くの不明である。しかし、多数の家形埴輪片が出土していることは注目される。特に重要なのは、焼成や胎土、色調より、3・4、5・6、7～9、2・13は、それぞれ同一個体あるいは同一工人によって製作されたものの可能性が高いと判断できることである。また、破片の観察より、切妻造り、入母屋造り、寄棟造りの各種家が存在していた可能性も推測できる。これらのことから、高熊古墳には様々な形態の家形埴輪が樹立されていたことがわかる。

人物埴輪

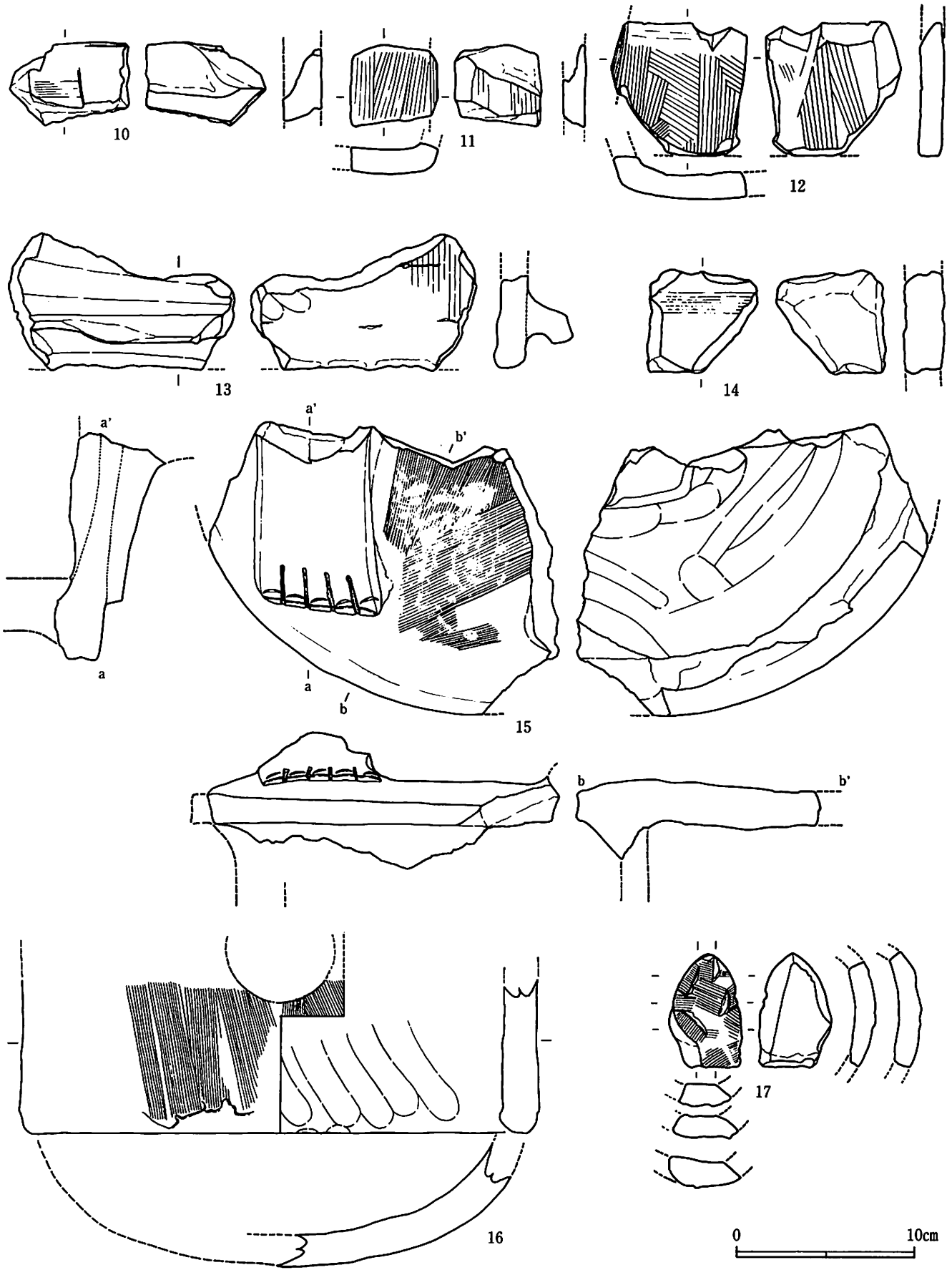
次に、人物埴輪について述べる。15は人物の右足部である。素足を表現していることから、力士と考えられる。人物埴輪の力士は、芸能的要素と共に、守護や威儀の意味合いもあったと考えられている。出土数はそれほど多くはないが、ほぼ全国的に分布している（亀井1995）。また、この破片には左足の痕跡がわずかに残っている。そこから判断すると、左足は右足より一歩前に出るような形で作られていたことがわかる。中指と薬指の間には、赤色顔料が残っている。16は、形象埴輪の台部と推測される。楕円筒形であり、透孔が正面に位置する。焼成や色調などが類似することを重視すれば、15の台部である可能性がある。

不明形象埴輪

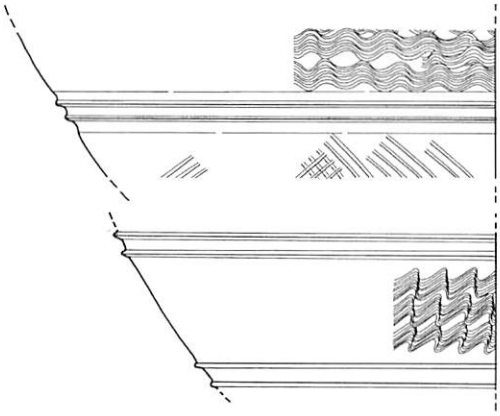
最後に、形態が不明な形象埴輪片について述べる。17は器壁が湾曲している。また、外面にはハケ工具を途中で静止させることによって作られた凸部を多く有している。器壁が湾曲していることから判断すると、この破片は人物埴輪の頭部である可能性がある。そうした場合、ハケ目と凸部による表現は竪櫛を表したものとも考えられる。14の外面には、ヨコハケが施されている。しかし、全体的に摩滅しており、その形態は不明である。



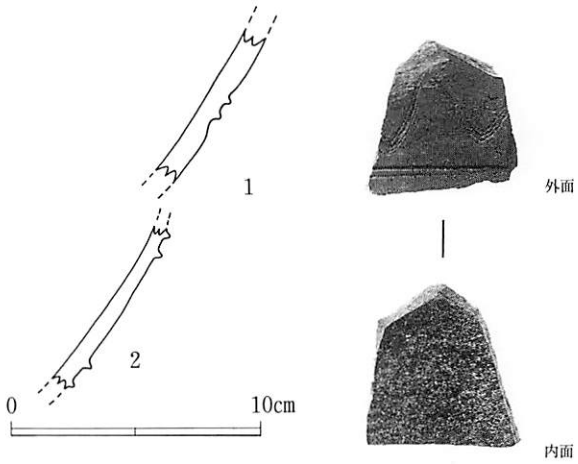
第９図　形象埴輪実測図（１）



第10図　形象埴輪実測図（2）



第11図　須恵器器台実測図



第12図　須恵器器台

（３）須恵器（第11・12図、図版５－１～３）

今回の調査で須恵器は合計７点出土しているが、明確に器形の判断できるものは３点（器台２点・甕１点）にすぎない。器台はいずれも坏部であり、口縁端部を欠く。１は２条１組の突帯がまわり、その上部には波状文が施される。外面下部には平行タタキが施されている。内面はナデ調整である。２も２条１組の突帯が上下に１組ずつまわり、それらの突帯間に３条の波状文が施される。中央の波状文が最後に施されている。２の波状文は、１に比べ山部と谷部の間隔が狭い。内面にはナデが施されている。第12図に示す須恵器片は器形の判断が困難であるが、器台の坏部である可能性が高い。外面には波状文と思われる線刻が施されている。内面はナデ調整である。図版５－３の甕は、外面に平行タタキ、内面にナデが施されている。内面のタタキ当て具痕はきれいに消されている。図示していないが、波状文を持つ須恵器片がもう１点出土している。坏蓋あるいは鼎ではないかと考えられるが明確でない。

須恵器

以上の須恵器は、器台にみられるシャープな突帯や精美な波状文、甕内面のナデ調整の様子などから、陶邑編年（田辺1966）のＴＫ208型式に位置付けられる。

須恵器型式

３．古墳に伴わない遺物

（１）古墳築造以前の溝出土土器（第13図、図版５－４）

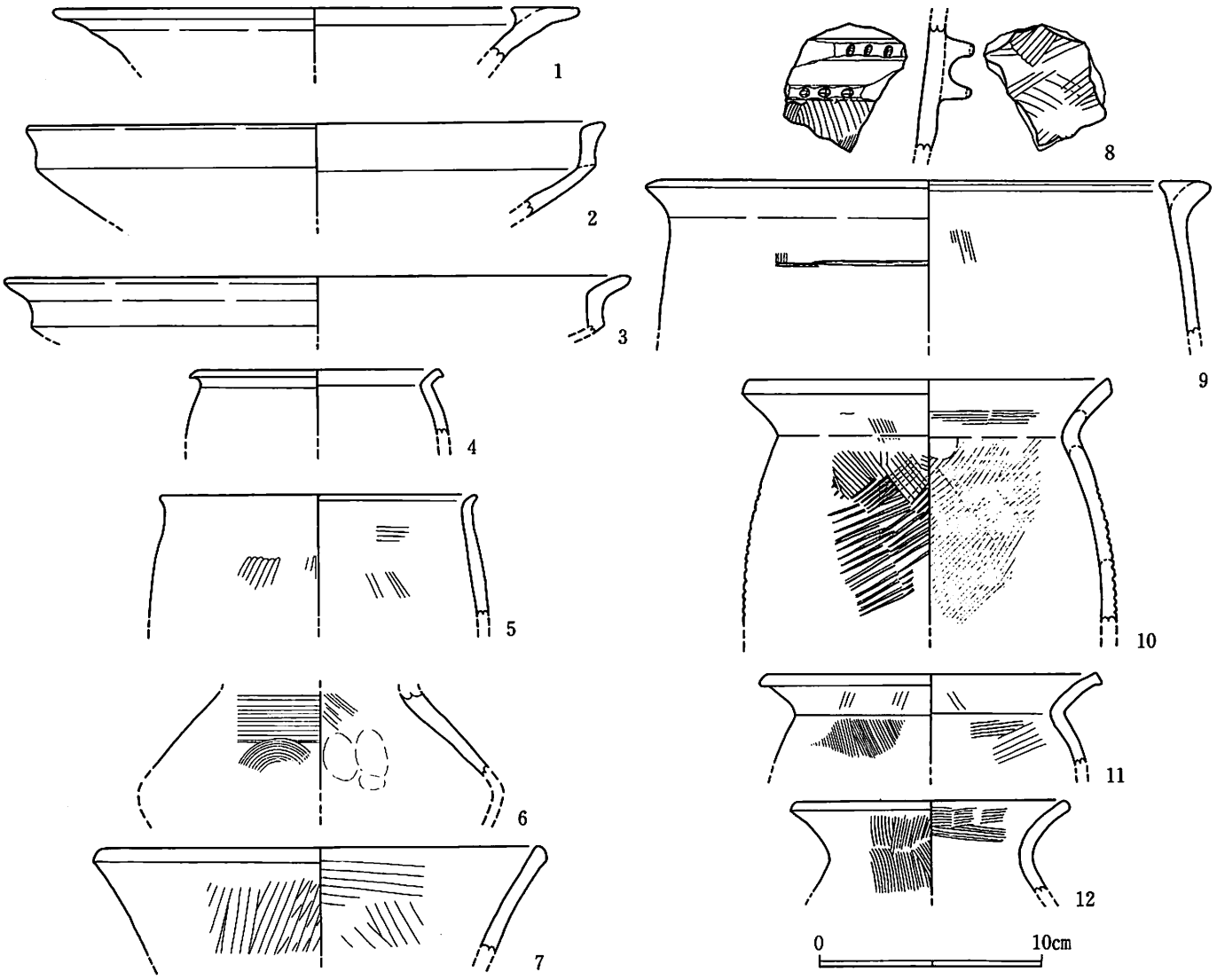
今回の調査では、古墳築造以前の溝から多数の弥生土器、古墳時代前期前半の土師器が出土した。器種別にみると、甕の出土量がもっとも多い。大部分が器形不明の小破片であるので、図示することができたものについて報告する。

１～３・５・６・８・９は弥生土器である。１～３は高坏で、内外面にナデが施されている。１が中期、２・３は後期に位置付けられる。５は鉢である。外面にはヘラミガキの後ナデが、内面にはハケの後ナデが施される。前期に位置付けられる。６は壺で、横方向のハケの後に重弧文が描かれている。いわゆる免田式系の長頸壺で、後期に位置付けられる。８は甕で、刻み目のある二条の突帯がなでつけられる。外面には縦方向のハケが、内面には不定方向のハケが施されている。前期に位置付けられる。９も甕で、胴部外面には横方向の１条の沈線がみられる。内外面には縦方向のハケの後にナデが施されている。

弥生土器

４・７・10～12は土師器である。４は鉢である。口縁内外面には横方向のナデが、胴部内面には不定方向のナデが施される。７は直口壺である。外面には縦方向のハケが施されており、内面上部には横方向のハケが、内面下部には斜め方向のハケが施される。４・７は、ともに古

土師器



第13図　古墳築造以前の溝出土土器実測図

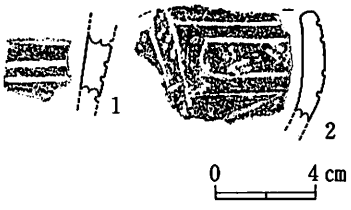
墳時代前期前半に位置付けられる。10～12は甕である。10は胴部外面に細筋で右上がりのタタキが施されており、熊本県地域の弥生土器とは異なる特徴をもつ。頸部外面にはハケ、胴部内面には斜め方向のハケ、口縁部には横方向のハケが施される。11は胴部外面に縦方向のハケが施される。口縁部内面には左上がりのハケが、肩部内面には不定方向のハケがみられる。12は外面に縦方向のハケが、内面には不定方向のハケが施される。以上の甕のうち、10は右上がりの細筋タタキという新しい要素を有することから古墳時代前期初頭、11・12はそれに後続する古墳時代前期前半に位置付けられる。野田拓治による編年では、10は古閑期、11・12は山下期に該当する（野田1982）。

（2）その他の出土土器（第14・15、図版6）

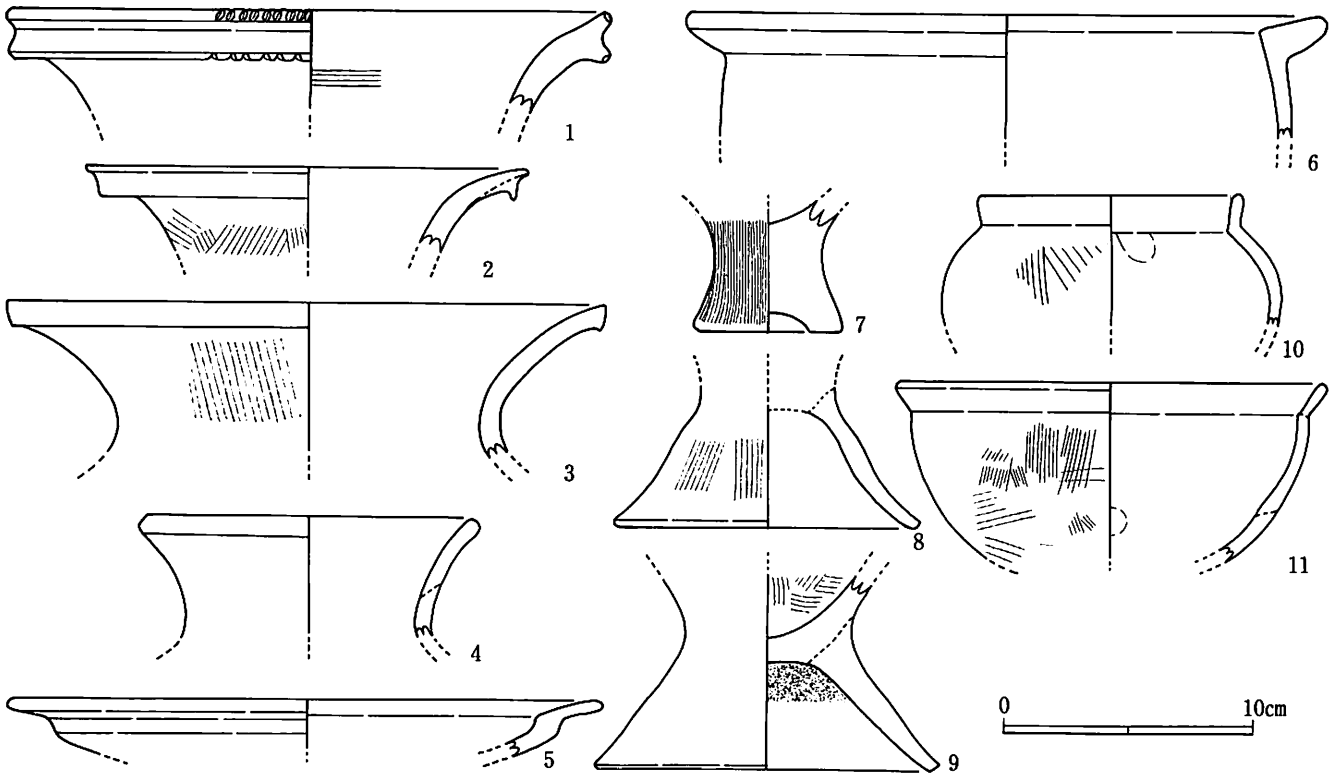
以上のほかに周溝埋土や表土中などから、縄文土器、弥生土器、古墳時代前期の土師器、陶磁器が出土している。

縄文土器

縄文土器は、出土した3点のうち図示が可能な2点について記す（第14図）。1は小片のため器種は不明である。幅の狭い縄文を持つことから鐘崎式土器と考えられる。2は深鉢形土器である。



第14図　縄文土器実測図



第15図　その他の出土土器実測図

１と共通の特徴を有する鐘崎式系統の土器であるが、口縁直下に文様帯を有するため鐘崎式土器よりも古いものと考えられる。また、口縁部は波状口縁である。

弥生土器

第15図の１・５～９は弥生土器である。１は壺である。口縁端部およびその直下の突帯上に刻み目をもつ。内面下位には横方向のハケ目が残る。後期後半のものと考えられる。５は高坏、６は甕である。両者とも全面にナデが施される。５の口縁部は内湾する坏部から急激に外方へ屈曲して伸び、口縁端部は丸くおさめられる。６の口縁部は鋤先口縁が退化した形態である。中期末から後期初頭のものであると考えられる。７～９は甕の脚部である。７の外面には縦方向のハケが施される。８の外面には縦方向のハケの後にナデが施されている。７・８とも内面にはナデが施される。９の外面には板で押圧した後にナデ、内面にはハケが施される。脚部内面上半部に砂粒が付着する。７は中期半ば、８・９は後期後半のものであると考えられる。

土師器

第15図の２～４・10・11は土師器である。２・３は広口壺である。外面にはハケ、内面にはナデが施される。２の口縁下端部は粘土を貼り付けることによって形成される。４は直口壺である。口頸部はほぼ直線的にのび、端部は丸みを帯びる。全面にナデが施される。10・11は鉢である。10は口頸部が肩部からほぼ直立して伸び、端部は丸い。外面にはハケ、内面にはナデが施される。11の口縁部は肩部から外側に屈折し、端部はやや丸い。外面にはハケが、内面にはナデが施されている。以上の土師器は、調整や口縁部の形状から古墳時代前期前半に位置付けられる。野田編年では古閑期・山下期に該当する（野田1982)。広口壺２点（２・３）については現在のところ他に類例は見られないが、口縁部の形状から菊池川流域の系譜をひくものと推定される。

陶磁器

今回の調査では15点の陶磁器片（図版６－３）が出土したがいずれも小破片であるため、得られる情報は少ない。その中で時期をある程度特定できる遺物には型紙絵付けの装飾技法で絵

付けされたものがある。型紙絵付け技法は17世紀から18世紀に行われ、その後一時断絶し、明治時代になって再開された技法である（仲野2002）。また、遺物は全体的に風化していない。このことから今回出土した陶磁器は、後者の明治時代以降に属する可能性が高い。

参考文献
亀井正道　1995「人物・動物はにわ」日本の美術第346号　至文堂
川西宏幸　1978「円筒埴輪総論」「考古学雑誌」第64巻第２号　日本考古学会
小林行雄　1976「直弧文」「古墳文化論考」平凡社
高橋克壽　1996「埴輪の世紀」歴史発掘９　講談社
竹中克繁　2003「円筒埴輪の地域性－熊本県地域の埴輪－」『先史学・考古学論究』Ⅳ　考古学研究室創設30周年記念論文集　龍田考古会
田辺昭三　1966「陶邑古窯址群」Ⅰ　平安学園考古学クラブ
仲野泰裕　2002「型紙絵付け」「日本陶磁大辞典」角川書店
野田拓治　1982「古式土師器の成立と展開－特に中部九州における編年試案－」「森貞次郎博士古稀記念古文化論集」森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会
三輪嘉六・宮本長二郎　1995「家形はにわ」日本の美術第348号　至文堂

第１表　掲載出土遺物一覧表

図番号	器種	時期	出土位置	色調	図番号	器種	時期	出土位置	色調
8－1	円筒埴輪	古墳中期	前2Tr.表土	Hue7.5YR7/6	10－13	家形埴輪	古墳中期	表面採集	Hue7.5YR6/8
8－2	円筒埴輪	古墳中期	表面採集	Hue7.5YR6/6	10－14	形象埴輪	古墳中期	前1Tr.周溝埋土	Hue7.5YR6/6
8－3	円筒埴輪	古墳中期	表面採集	Hue5YR6/6	10－15	人物埴輪	古墳中期	前2Tr.表土	Hue10YR6/4
8－4	円筒埴輪	古墳中期	ク1Tr.表土	Hue7.5YR5/6	10－16	人物埴輪	古墳中期	前1Tr.周溝埋土	Hue10YR4/6
8－5	円筒埴輪	古墳中期	表面採集	Hue7.5YR7/6	10－17	形象埴輪	古墳中期	前1Tr.北半部5層	Hue7.5YR8/6
8－6	円筒埴輪	古墳中期	表面採集	Hue5YR7/6	11－1	器台	古墳中期	前1Tr.周溝埋土	Hue10Y4/1
8－7	円筒埴輪	古墳中期	表面採集	Hue7.5YR6/8	11－2	器台	古墳中期	前1Tr.北半部5層	Hue5Y5/1
8－8	円筒埴輪	古墳中期	表面採集	Hue7.5YR7/6	12	器台	古墳中期	前1Tr.北半部8層か	Hue10Y6/1
8－9	円筒埴輪	古墳中期	表面採集	Hue5YR5/8	13－1	高坏	弥生中期	ク1Tr.古墳以前溝	Hue10YR8/3
8－10	円筒埴輪	古墳中期	表面採集	Hue7.5YR6/8	13－2	高坏	弥生後期	ク1Tr.古墳以前溝	Hue2.5Y8/3
8－11	円筒埴輪	古墳中期	前2Tr.表土	Hue5YR6/8	13－3	高坏	弥生後期	ク1Tr.古墳以前溝	Hue10YR8/4
8－12	円筒埴輪	古墳中期	廃土中	Hue7.5YR6/6	13－4	鉢	古墳前期	ク1Tr.古墳以前溝	Hue2.5Y6/1
8－13	円筒埴輪	古墳中期	ク2Tr.周溝埋土	Hue5YR7/8	13－5	鉢	弥生前期	ク1Tr.古墳以前溝	Hue10YR7/4
8－14	円筒埴輪	古墳中期	表面採集	Hue10YR7/3	13－6	壺	弥生後期	ク1Tr.古墳以前溝	Hue10YR8/3
8－15	円筒埴輪	古墳中期	前1Tr.北半部8層か	Hue5YR6/6	13－7	壺	古墳前期	ク1Tr.古墳以前溝	Hue10YR7/4
8－16	円筒埴輪	古墳中期	前1Tr.周溝埋土	Hue5YR4/8	13－8	甕	弥生前期	ク1Tr.古墳以前溝	Hue10YR6/4
8－17	円筒埴輪	古墳中期	前1Tr.北半部8層か	Hue7.5YR4/6	13－9	甕	弥生中期	前1Tr.古墳以前溝	Hue10YR5/4
8－18	円筒埴輪	古墳中期	表面採集	Hue7.5YR8/6	13－10	甕	古墳前期	ク1Tr.古墳以前溝	Hue2.5Y8/4
8－19	円筒埴輪	古墳中期	前1Tr.周溝埋土	Hue7.5YR7/8	13－11	甕	古墳前期	前1Tr.古墳以前溝	Hue2.5Y8/4
8－20	円筒埴輪	古墳中期	表面採集	Hue7.5YR6/6	13－12	甕	古墳前期	ク1Tr.古墳以前溝	Hue10YR8/3
8－21	円筒埴輪	古墳中期	表面採集	Hue7.5YR8/4	14－1	不明	縄文後期	ク1Tr.表土	Hue10YR7/6
9－1	家形埴輪	古墳中期	前2Tr.表土	Hue7.5YR6/6	14－2	深鉢	縄文後期	表面採集	Hue10YR7/4
9－2	家形埴輪	古墳中期	前2Tr.表土	Hue5YR7/8	15－1	壺	弥生後期	廃土中	Hue7.5YR7/4
9－3	家形埴輪	古墳中期	表面採集	Hue7.5YR8/8	15－2	壺	古墳前期	前1Tr.周溝埋土	Hue10YR7/3
9－4	家形埴輪	古墳中期	前1Tr.北半部2層	Hue7.5YR8/8	15－3	壺	古墳前期	前2Tr.表土	Hue2.5Y8/6
9－5	家形埴輪	古墳中期	ク1Tr.周溝埋土	Hue7.5YR7/6	15－4	壺	古墳前期	ク1Tr.周溝埋土	Hue10YR5/3
9－6	家形埴輪	古墳中期	前1Tr.周溝埋土	Hue7.5YR8/8	15－5	高坏	弥生後期	前2Tr.表土	Hue2.5Y8/4
9－7	家形埴輪	古墳中期	表面採集	Hue7.5YR5/6	15－6	甕	弥生後期	前1Tr.周溝埋土	Hue10YR8/4
9－8	家形埴輪	古墳中期	表面採集	Hue7.5YR6/4	15－7	甕	弥生中期	前1Tr.周溝埋土	Hue7.5YR7/4
9－9	家形埴輪	古墳中期	表面採集	Hue5YR6/4	15－8	甕	弥生後期	前1Tr.周溝埋土	Hue10YR7/4
10－10	家形埴輪	古墳中期	前2Tr.表土	Hue7.5YR8/8	15－9	甕	弥生後期	前1Tr.周溝埋土	Hue10YR8/3
10－11	家形埴輪	古墳中期	ク1Tr.周溝埋土	Hue5YR6/8	15－10	鉢	古墳前期	ク1Tr.周溝埋土	Hue10YR8/2
10－12	家形埴輪	古墳中期	前2Tr.表土	Hue5YR7/8	15－11	鉢	古墳前期	ク1Tr.周溝埋土	Hue2.5Y8/4

註１　表示している色調は外器面の色調である。色調は小山正忠・竹原秀雄編著　1986「新版　標準土色帳」日本色研事業株式会社によった。
　２　表中の前１Tr.、前２Tr.、ク１Tr.はそれぞれ前方部第１トレンチ、前方部第２トレンチ、クビレ部第１トレンチを示す。

四　まとめ

高熊古墳は熊本県鹿本郡植木町古閑天神平に所在する前方後円墳である。当古墳は舌状台地の先端部に位置している。そこは、眼下に菊池川中流域の菊鹿盆地を望む眺望の地である。墳丘は周囲を大きく削られているため、本来の形態、規模は明らかでない。現在、墳丘北側は山林で、それ以外は畑として利用されている。墳丘の現存長は約59m で、前方部を西に向ける。ＧＰ１杭とＧＰ２杭を結んだラインを墳丘主軸と仮定すれば、その方向はN50°57′50″Wとなる。現状で葺石は認められない。段築については、後円部では確認できない。しかし、クビレ部から前方部にかけての標高70.00～70.25m付近に傾斜が緩やかになっている箇所があるため、この位置にテラス面があった可能性がある。その場合、今回検出した墳端の標高を考慮すると２段築成に復元することも可能である。 **墳丘の現状**

墳丘の南側には農地が広がっているため、トレンチの設定が困難である。そこで、墳丘北側の山林部に計３本のトレンチを設定した。調査の結果、以下のような成果を得た。 **トレンチの設定**

第一に、一部分ではあるが墳丘形態、規模に関しての知見を得ることができた。まず、墳端の一部を確認した。墳端は現在の墳丘裾から約3.5m 外側に位置していた。また、墳端のラインはクビレ部第１トレンチ内で屈曲しており、ここが後円部と前方部の連接部分である可能性がある。この墳端ラインをもとに墳形の復元を試みた。その結果、前方部北側のラインは、標高70.75mラインに沿う形で前方部へ延びていることが観察できた。この観察が正しいのなら、墳端ラインは前方部第１トレンチのやや西側で、北へ湾曲するように延びていく可能性がある。また、後円部と前方部の連接位置と思われる箇所から現状の後円部の中心点までの距離が約25mであった。このことを根拠とすれば、後円部の直径は約50m程度とすることが可能である。 **墳丘形態の復元**

また、これまで知られていなかった周溝の存在を確認できた。周溝は墳丘に沿うような状態で検出されている。したがって、その形態は鍵穴形であった可能性がある。前方部第１トレンチ中央部でみられた平坦な地形は周溝に平行しているため、周堤となる可能性がある。

第二に、今回、円筒埴輪と須恵器の両者を検出することができた。円筒埴輪には器壁が薄くつくりが丁寧なものと、器壁が厚くつくりが雑なものがある。また、Ｂ種ヨコハケが施されるものが一定量存在する。形象埴輪については調整が丁寧で精美な印象を受ける。このような埴輪の様相から、高熊古墳の埴輪製作には、埴輪製作に熟練した工人と、その指導を受けながら埴輪製作をおこなった経験の浅い工人の、少なくとも２タイプの工人がかかわっていたことがうかがえる。なお、埴輪の時期は、その調整や焼成などから川西編年のⅣ期に位置づけられる。 **出土遺物**

高熊古墳において須恵器は今回の調査で初めて確認された。器種は器台や甕で、これらはTK208型式に当たると考えられる。この須恵器型式の年代観は川西編年Ⅳ期という円筒埴輪の年代観と矛盾しない。円筒埴輪と須恵器型式の年代観をあわせて考えると、高熊古墳の築造された年代は５世紀半ば、古墳時代中期中葉であった可能性が強くなった。 **築造年代**

以上の成果をもとに、熊本県地域における高熊古墳の性格について若干の考察をおこなう。

熊本県地域において、前方後円墳は熊本市域を挟んで南北両地域に分布する。前方後円墳の築造が開始されるのは古墳時代前期前葉の宇土半島基部地域であり、城ノ越古墳（前方後円墳・43m)、向野田古墳（前方後円墳・86m）などが築造される。これ以降、前期後葉まで大 **高熊古墳の性格**

型の前方後円墳が築造されるが、その後は、規模が縮小する。前期後葉には菊池川下流域でも大型の前方後円墳が築造されるようになり、天水立花大塚古墳、藤光寺古墳、山下古墳などが築造される。中期中葉になると、前方後円墳の築造地域は高熊古墳が所在する菊池川中流域に移動する。

菊池川中流域において最初に築造される前方後円墳は菊池川左岸下手に所在する岩原双子塚古墳である。岩原双子塚古墳は熊本県内でも有数の規模をもつ前方後円墳である。周辺には多くの古墳、横穴墓が築造される。その後、前方後円墳が築造される地域は菊池川支流の岩野川流域に移動し、蛇塚古墳（前方後円墳・65m）が築造される。

高熊古墳の築造

中期中葉から後葉にかけて、熊本県地域では一時的に前方後円墳の築造が低調になるが、菊池川流域もその例外ではない。高熊古墳は、そのような時期にあって、これまで前方後円墳が築造されていなかった、菊鹿盆地南端の合志川流域に突如築造されているのである。加えて、今回出土したつくりの丁寧な円筒埴輪、形象埴輪から考えると、高熊古墳の被葬者は近畿地域の勢力と密接な関係を持っていたことが考えられる。これらのことから、高熊古墳は、築造当時、熊本県地域でもっとも有力な古墳の１つであったとみることができる。高熊古墳築造以後、合志川流域では塚園古墳、装飾古墳である横山古墳などの前方後円墳が後期後葉まで築造されるが、全体的に墳丘の規模は縮小している。

江田船山古墳と高熊古墳

中期後葉になると菊池川下流域左岸上手に清原古墳群の造営が開始され、後期前葉になると、江田船山古墳が築造される。江田船山古墳は菊池川流域内において、高熊古墳に続く前方後円墳である。そのような点から、高熊古墳は江田船山古墳出現前夜の熊本県地域の状況を考える上できわめて重要な古墳であるといえる。

高熊古墳築造以後

後期中葉になると前方後円墳が築造される地域は菊池川中流域に移動し、菊鹿盆地の中でも最も東側の菊池地域に前方後円墳が築造されるようになる。木柑子フタツカサン古墳、木柑子高塚古墳がそれであり、これらの古墳を最後に菊池川流域での前方後円墳の築造は終了する。その後、この地域に古代山城の鞠智城が築造されることは、当地域の歴史を考える上で非常に興味深い。

今後の課題

高熊古墳は、熊本県地域の前方後円墳築造が低調な時期にその前後を繋ぐ古墳として、菊池川流域だけでなく、熊本県地域全体の古墳時代社会を考える上で非常に重要な意味を持つ古墳である。このことが、今回の調査でより明らかになったといえるだろう。しかし、調査面積が限られていたため、今回の調査では、墳丘形態、規模に関してわずかな情報を得たに過ぎない。今後、周辺地域を含めて継続的に調査することによって、高熊古墳の性格、周辺地域とのかかわりを解明していきたい。

参考文献

高木恭二　2003「熊本における古墳の動向」『新宇土市史』通史編第１巻　自然・原始古代　宇土市